

イチゴ炭疽病情報第1号

令和元年10月1日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

イチゴ炭疽病の発生に注意しましょう！

1 発生状況

9月下旬に県内27ほ場で行った巡回調査において、発病株率が1.81%（平年0.28%、前年0.04%）で、過去10年と比較して最も高い状況です。8月中下旬に降水量が多かったことに加え、9月以降も高温が続いていることが要因だと考えられます。名古屋地方気象台9月26日発表の1か月予報によれば向こう1か月の平均気温は高い確率70%で、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。イチゴ炭疽病の発生に好適な条件が続くため、注意が必要です。

2 本病の生態等

- (1) ランナー、葉柄、葉などに病斑が発生する局所的な症状と、株が萎凋枯死する全身症状（図1）の2種類があります。ランナーや葉柄に発生する病斑は長径3～7mm程度の黒色、少し陥没した紡錘形または楕円形です（図2）。この病斑が拡大すると、先の葉が枯死します。また、多湿時には病斑上に鮭肉色の粘塊状または粉状の分生子層を形成します（図3）。葉に発生する病斑は、直径2～3mm程度の汚斑状です（図4）。



図1 全身症状



図2 ランナーの黒色病斑



図3 病斑上にできた鮭肉色の分生子層

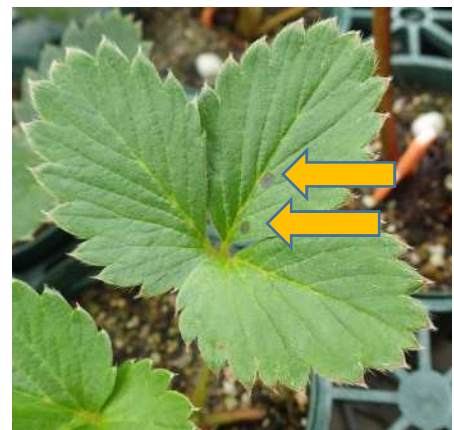


図4 葉の病斑

(2) 本病の病原菌は糸状菌で、発育適温は28℃前後で、高温を好みます。菌の胞子が雨水やかん水などの水滴に混じって飛散し、感染が広がります。

3 防除対策

(1) 発生を確認したら、発病株や隣接する株はすみやかに抜き取りましょう。罹病残渣は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し、適切に処分しましょう。

(2) 下記の表を参考に、予防散布しましょう。

(3) 愛知県において、QoI 剤（FRAC コード：11）に対する耐性菌の発生を確認しているため、本病に対して使用することは控えましょう。

(4) 耐性菌管理のため、同一のFRAC コードの農薬は連用しないようにしましょう。予防散布を行ったにもかかわらず、発生の多いほ場では、耐性菌の発生が疑われるため、他系統の薬剤を使用しましょう。

表 イチゴ炭疽病に対する主な防除薬剤

薬剤名	成分名	使用時期	本剤の 使用回数	FRAC コード
オーソサイド水和剤80	キャプタン	収穫30日前まで	3回以内	M4
ゲッター水和剤	ジエトフェンカルブ、 チオファネートメチル	収穫開始21日前まで	3回以内	10、1
セイビアーフロアブル20	フルジオキシニル	収穫前日まで	3回以内	12

FRAC コードは殺菌剤の作用機構による分類を示す。

FRAC コードの詳細は、https://www.jcpa.or.jp/labo/jfrac/pdf/code_pdf01.pdf を参照する。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。